

小川独笑と小川宗

菊池 武

明治維新の変革期に当たつて、仏教界には徳川三百年の御用仏教と化した生活の安定による僧侶の墮落と、遊民化に対する反省が起つた。一方、廃仏毀釈の嵐に抗して、日本仏教の近代化が強く叫ばれた結果、信仰の自由を仏教の上に実現しようとして、島地黙雷・清沢満之等の勝れた指導的改革者が輩出した。然しこれ等は、教団を離れずに主張され、又単にインテリだけにしか受け入れられない様な、高度の哲学的思索から来る近代化でしかなかった。

所がこゝに、教派教団から全く離れて、野にあつて民衆と共に仏教の自由な信仰を叫んだ人がいた。それは極小さな範圍の人からではあるが、小川宗の開祖と呼ばれている小川独笑居士である。その主張と信仰は、現在の我々に対しても教えるものが大きいと思われる。小川独笑（本名丈平）は、天保五年に豊前国築上郡千束村（現在の豊前市千束町）に生れた。小川家は代々地方の庄屋であり、生母が天保九年に五歳の彼を残して世を去つた後、真宗の篤信家であつた祖母の手に依つて育てられたのが、彼の後年の信仰の芽となつた。そして、幼児の頃から學問の道に励み、又仏法に關しての研鑽も熱心ではあつたが、明治四年の百姓一揆に連座して、獄中に幽閉された時、天神の感応があつた事と、中年の頃の再三の大病に罹つた事などが、彼に特異な人生觀や宗教觀を植え付けたものと考えられ

る。此の様に、明治十二年四十六歳の時、夕照山（現在の本山）に閑居してから二十年の間に、大藏經八千五百余卷を三回に亘つて読みこなし、此の中から抜抄して、五卷に及ぶ經典を書写し、他仏教に關する著書は千四百卷にも達し、それは寢食を忘れての念仏精進の毎日であつた。そして終に、「専修念仏の一流は、唯々念仏を専称する外一切他の条件無しに、凡聖等しく救われる。」と云う、簡明至極の宗旨を開闡したのであつた。その為彼の主張は、信仰を独占する教団や寺院や僧侶を否定し、又偶像としての仏像も、仏壇も、儀式的読經も否定したのである。所謂仏壇莊嚴読經儀式の形式無用を盛に解くのである。更に、冥加金を多く出せばこれを信心の人とするのを「金錢手足」と称し、「自分は、一切經典及び諸聖教を拝読して見たが、後生往生・信仰成就の為に、金錢手足を要すと教えた教文は一つも無かつた。況んや、要とするなど説いた御文は一片も無かつた。」と、述べている。宗教を生活の道具としている僧侶を彼は、「生活僧」と極め付けたのである。

此の様な独笑の教えは、地元は勿論全国各地に多数の信者を醸し出し、「親近会」なる全国的組織が出来た。そして、各地方に「念仏会」が作られ、一時は大きな勢力を有していた。その結果、壇那寺から離壇し、仏壇を廢止し、葬式を簡素化するという實際的な問題にまで發展して行つた。こゝに至つて、当然各地に於て色々批判・反論を起し、既成教団側は小川宗は邪法であり、外道であると非難した。特に、明治四十四年の東本願寺に於ける異安心問題は、各新聞が此の様子を書き立て、社会の注目を集めたので知られている。その為、小川宗の信者達は異端視され、狂人呼ばわりされ、「念仏会」を催している家に石や瓦を投げ付ける者もあり、宗教以外の

社交面迄も村八分として、攻撃・圧迫は終戦頃迄続いたのである。

さて、独笑は大正六年一月に八十四歳を以て世を去ったが、信者は、遺骨を分けて信者の集中している地方に持ち帰り、分霊碑なるものを建てた。それは、豊前市の本山の他に全国九箇所（山口県一・鳥取県一・兵庫県二・京都府四・岐阜県一）で、真宗の盛な辺境の地が多い。しかし、此の様な信仰団体の当然の帰結として、彼の死は信者数を減少させ、現今全国を合せても百人にも満たない状況となり、又一方に於ては、生前から語り伝えられていた彼に關しての種々の奇蹟は、彼の死後彼を一つの神秘化しようとする云う信者の素朴な願いと共に、増々強く信じられて行くのである。そして、信者は、毎月九日の彼の命日には、其々の地方で信者の宿を回りながら念仏会を開き、高声念仏の後、信仰談と会食するのが通例となつてゐる。又、三月九日には全国の信者が豊前市の本山と兵庫県豊岡市香住で、三年毎に交代して念仏大会を催している。香住は、現在二十一戸ばかりの小字であるが、一村全部小川宗に改宗し、念仏村と呼ばれている（前の出石郡神美村字香住）。さて、一般に此の信者達は高等教育を受けた者は殆ど無く、何時如何なる時でも念仏三昧の声を絶やさぬ淳朴なる庶民である。嘗ては大部分真宗寺院の信者であつたが、現在では総て離壇しており、仏壇は勿論持たず、葬式にも寺院より僧侶を迎えず、一般人の様な葬式の虚礼・虚飾も無く、各地方の代表者が取り仕切つて、独笑の手になる「葬文」を拝読し、焼香するだけで済ませてしまふのである。そして、彼等は布教という事も来る者は拒まず、去る者は追わぬ主義で、強制も勧誘もしない。又、人数さえ多く集まれば法義の繁栄とする様な布教には関心がなく、唯心を許した同志の間だけで信仰を深め確かめ

て行くのであるとし、信者の間の結束も固く、連絡・相互扶助なども緊密である。そして、お互に独笑の著書を回し読みしたり、書写したり、彼等なりの著述も試みている。

結局小川宗は教団からも社会からも異端視されはしたが、しかし独笑は既成教団が信仰を独占して信仰や教義や安心を押し付ける寺院機構の矛盾と虚構と独善を鋭く見透かしていた。又島地黙雷・清沢満之等の明治の立役者達の近代化は、無知文盲の庶民を置き忘れているという事への反撥でもあつた。即ち、西洋の學問を導入して一部のエリートのみを満足させる様な哲學的に高い次元の思弁と瞑想に対しても独笑は、封建的鎖鎖性の教団の枠から脱し切れない教団・僧侶本位の独善的ドグマとしか評価しなかつた。従つて独笑は徹頭徹尾教団組織とは離れて在家主義に徹し、一切の救いを唯念仏一行にのみ掛けた純粹念仏主義を貫いたのである。これは信を生命とする仏教の原点を指し示すの真剣な問い掛けであり、冒險的な試みであつた。しかしそれが余りにも純粹なるが故に現実社会とは懸け離れ、無欲・無我に徹した孤高なるが故に信仰者の大きな組織力とは成らなかつた。現在も社会の片隅で淡々と生き存えてはいるが、それは世俗化時代の波の中に今や消え去ろうとしている。しかし現在の宗教界を見る時、彼の叫びは純粹なる信が何であるかを示したのであり、これからの宗教界の辿るべき道を何らかの形で示唆していると考えられ、此の存在の意義も大きいと云うべきである。

最後に、これを一部の地方史（「福知山市誌」下巻の二・昭和三十三年、「郷土夜久野歴史篇付地誌篇」昭和四十一年）が、異安心として扱い、秘事法門と同類視しているが、その主張を良く見ると、これ等は全くの關係の無い臆説に過ぎ無い事が分るのである。